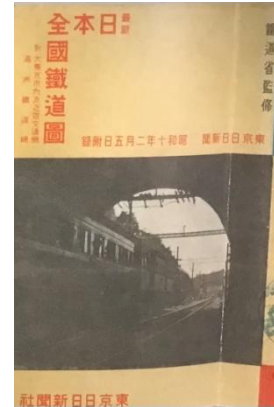


最新日本全国鉄道図

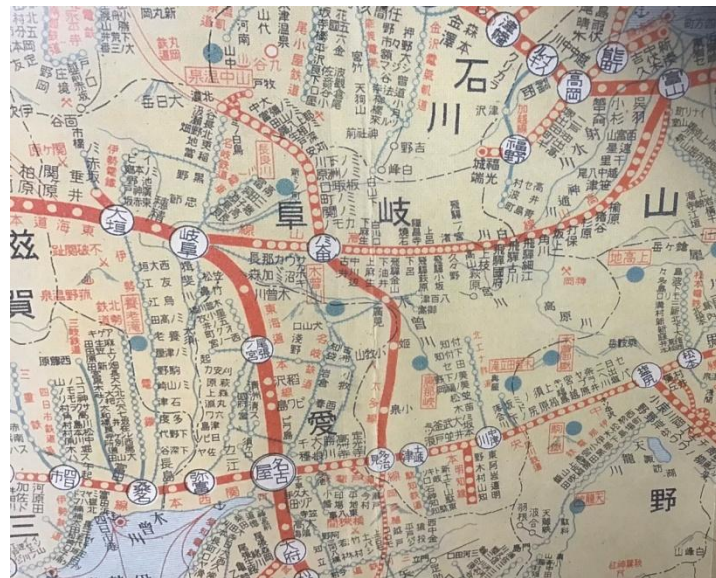
昔から地図をずっと見るのが好きだった。『地図情報』162号、2022年8月号に、「最新日本全国鉄道図」東京日日新聞、昭和10年2月5日が、付録についている。

東京日日新聞は明治5年に発行された東京発の日刊紙。当時の新聞には日本・世界地図、鳥瞰図など地図の付録が付くことがあり、現在より地理的思考や世界情勢重視の傾向があった。本図は昭和10年2月5日発行だが、同紙同年1月1日には同じく「東京日日新聞元旦付録 丹那開通記念最新日本全国鉄道図付満州鉄道網」（トンネルは大正7年3月起工、昭和9年12月1日開通）としてデフォルメのない全国鉄道路線図の付録があった。



カバー写真は丹那トンネルの熱海側で、全長約7.8キロメートルにも及ぶトンネルのため、蒸気機関車が運行できず、開通時から電気機関車が列車を牽引した。

全国鉄道図には、地域ごとに路線や駅名などを記した詳細な路線図が掲載されている。1935年という時代を反映して、満州・朝鮮・台湾の路線図も含まれている。なかでも注目したのが、父が鉄道マン(国鉄職員)として勤務した東海地方の鉄道路線図である。懐かしい路線名や駅名がいくつも出てくる。1930年代半ばには、現在に至る鉄道網の骨格ができていたことが確認できる。



父が勤務してきた駅名などをたどってみよう。名古屋では機関区、そして岐阜県高山市で客貨車区、越美南線の深戸駅、高山線の下油井駅、飛騨一ノ宮駅、中央線の勝川駅だったと思う。

私も名古屋で生まれ、父の転勤とともに、中学は高山、高校は高山、そして深戸駅に近い郡上八幡へと転校した。名古屋は千種本町の鉄道官舎と高見町アパート、高山では線路沿いの官舎で暮らした。蒸気機関車の走る姿と音が忘れられない。深戸駅の官舎は駅のすぐ隣にあり、何時間に1本の列車に飛び乗ったことも。幼少から高校までは、鉄道とのつながりが深かった。

(2022年10月20日)